

言葉を挿ませず、考える間を与えないテクニックだ。仏教用語にも發音と意味が類似した「彈呵」がある。彈呵は、叱り咎める、非難する

という意で大乗仏教の立場から小乗の教えに留まるものを叱咤した言葉だ。江戸っ子の啖呵は「胸の空くような歯切れの良い口調で、威勢がいい言葉をまくし立てる」ことだから、前記三例と共に通点がある。この演目は、地方訛りの田舎侍に江戸っ子が啖呵を切る場面が見せ場のひとつだ。地方の人々が集まる江戸の特徴も背景にある。上方にはない江戸落語の代表作とも言える。

この演目は、地方訛りの田舎侍に江戸っ子が啖呵を切る場面が見せ場のひとつだ。地方の人々が集まる江戸の特徴も背景にある。上方にはない江戸落語の代表作とも言える。

### ●ケチ（味噌藏）

ケチは吝嗇とも書く。吝は物惜しみをすること、嗇は農作物を収藏する穀物藏のことだ。西川如見の『町人囊』には「吝は私欲より出、儉約は天理より出」とある。吝は「ひかえる」や「儉約」とは一線を画す分かれ合はない精神を指す。それゆえに辞書を調べてみても「むさぼる」や「うらむ」などの意も書かれている。江戸時代は公共事業が少ないので多くの庶民の生活に役立つ架橋工事などは、商いで利益を上げた大店が資金を調達した。世間の評判を意識した下心も皆無ではないだろう。しかし根底には、利益だけの追求とは異なる別の価値観

が見えてくる。儲けること自体を罪悪と考え、分かち合うことによつて、その罪悪感を払拭できると考えていたのだ。ケチの語源としては「ケシ（怪事）の音転」や「弓を射て勝負を定むるケチ（結）」が考えられているが確かではない。

### ●一つ家（鰐沢）

一つ家は、人里離れた山野などにポツンと一軒だけある家のことだ。それだけで、何か曰く因縁がありそうである。古くからそこを舞台とした物語がつくられ、それらを「一つ家説話」と総称している。人を喰らう鬼婆の伝説ともいわれる能の「黒塚」は、その代表作であろう。「鰐沢」は、三遊亭円朝の三題嘶と云われてきた。幕末に盛んだった「三題嘶の会」で、円朝が「小室山の御封」「玉子酒」「鉄砲」を出されて作った。しかし同じ会で河竹黙阿弥に「玉子酒」「筏」「熊膏薬」が出題されたことも、資料でわかっている。今のところの結論としては、「粹狂連」という三題嘶の会に属した河竹黙阿弥が創り、それを譲られた円朝が芝居唄にした、とされている。河竹黙阿弥には「糸時雨越路一諷」という、「鰐沢」によく似た芝居の演目もある。

次回予告  
第669回 日本橋劇場(中央区立日本橋公会堂)にて。  
3月29日(金)より5時30分開場／6時00分開演

格 気 の 独 楽 ○ 三 遊 亭 歌 彦  
普 段 の 褂 ○ 柳 家 喬 太 郎  
千 物 花 箱 ○ 春 風 亭 柳 橋  
見 酒 床 ○ 春 風 亭 一 之 輔  
寝 ○ 立 川 龍 志

公演予定 4月25日(木)/5月21日(火)/6月25日(火)/7月29日(月)

#### □当世嘶家氣質 その252・三遊亭遊馬と「味噌藏」

見た目も芸も、スケールの大きな嘶家である。

背筋を伸ばせば、ただでさえ大きな体がさらに縱へと伸びて行く。どんな会場でも隅々まで届く、時に大きすぎる声。

そういう堂々たる高座姿で演じる落語が気持ち良い。相撲取りは愛嬌が溢れ、若侍に気概があり、商家の主に苦労人の優しさがある。

所属する落語芸術協会では、早くから「本格古典の成長株」と注目されて、文化庁芸術祭大賞にも輝いた。

当然のように寄席の出番が増えた。早い時間には短い滑稽嘶で客席を温め、トリで次々と長講に挑戦した。ところが、サラ口(興行の最初の出番)でも、トリでもない、間の出番をもらって、遊馬はハタと困った。

「俺には15~20分で演じるネタがない！」

短い滑稽嘶とトリの大ネタばかりの「両極端だった（本人談）」ことに、今更ながら気がついたのだ。

「師匠の小遊三に『遊馬の落語は長エからなあ』と言われて喜んでいたけど、それじゃ欠陥嘶家ですよ。さて、浅くも深くもない出番で何ができるかと、初めて真剣に考えました」

15分のネタがないなら、そういう尺（口演時間）のネタを覚える必要はない。だが、自分が好きなネタをどんな出番でもできるように作り直す道を選んだ。

「トリでやるネタですけど『味噌藏』が好きなんです。ケチな旦那の留守に、奉公人たちが大宴会を催して日頃の鬱憤を晴らすのが愉快だし、昔の商家の雰囲気もよく出てる。これを何とか短くできないかと」

まず主人公のケチな旦那を改造した。「カミさんを持つのは無駄だ」と女性蔑視のような発言をするのがどうにも嫌だというので、本編から女房の役を削ってしまった。カミさんがいないのだから、子供も生まれない。さらにケチの逸話も皆が共感できないものは外した。おかげで後半がすいぶんスッキリした。

「もちろん短くすればいいというわけじゃない。嘶の眼目である奉公人の宴会はたっぷり賑やかにやります。旦那が今夜泊まりになるかもと聞いた番頭の目がきらりと光り、『お泊まりですね？』という、この呼吸が好きなんですよ」

嘶の雰囲気を変えずに刈り込んで、「味噌藏」本編は15分前後にまとまったという。

「持ち時間は20分だけど、私の場合、改造以前のネタが体に入っている分、やってるうちに少し長くなるんです。だから、とりあえずは15分にしておいて、本番で20分にまとめます」

短くてもトリの出番と変わらぬという遊馬流の「味噌藏」。お手並み拝見である。

(長井好弘)

第六百六十八回  
參 論 研 究 会  
日時 ● 令和六年二月二十九日(木)より六時開演  
会場 ● 日本橋劇場(中央区立日本橋公会堂)  
主催 ● TBSテレビ

# 演目

柳亭左ん坊改め

道具屋 ● 柳家小太郎

千早ふる ● 五街道雲助

棒鰯 ● 三遊亭萬橋

『仲入』

味噌蔵 ● 三遊亭遊馬

鰍沢 ● 入船亭扇遊

三味線 太田園子 笛 春風亭一花  
松尾あさ子 太鼓 三遊亭歌彦  
前座 入船亭扇ばい

## 新・落語掌事典（二四八）田中優子

### ●与太郎（道具屋）

与太郎を調べると「でたらめ、嘘つき、ボンクラ、たわけ、うすのろ、間抜け」など類似の形容詞が満載だ。これは「生産性」などというものに価値を置く、狭い人間観を持つ者が書いたのだろう。落語における与太郎の人格設定は、江戸時代特有の多様な人間観に由来する。主体性がないように見えるが一徹（頑固）であり、罵倒されても決して感情むき出しの暴力沙汰にはならない。馬鹿げたプライドを持たないのだ。近現代人は全く違う世界を生きているかのようだ。現代人の多くは、手段でしかない金銭を生きる目的にしている。金銭の獲得能力を他者と比較し、他者の評価も気にする。その類のストレスは外圧だと思つてはいるが、落とし穴にはまる。実は内面にこそ自分を責める根源があるのだ。与太郎はその類のことは意に介さず、自分自身であります。見習うべき人間像だ。

### ●啖呵（棒鰯）

啖呵は痰火とも書く。痰は火の病と言われ、咳を伴つて激しく痰が出る病のことである。この病が治癒することを、胸がすつきりするところから「痰火を切る」といった。これとは別に「啖呵を切る」は「口上を言う、喋る」という香具師の隠語でもあった。この場合は聴衆に

「隠居」は、自由意志で仕事や世間での立場から退き、家督を譲り知つたかぶり（千早ふる）

（裏面へづく）